

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
184	明治27年	冬の部	小春日の竿に並べる雀かな	小春	時候
185	明治27年	冬の部	月に吠ゆる犬や十夜の人帰る	十夜	人事
186	明治27年	冬の部	夕しぐれ佐野のわたりを古法師	時雨	天文
187	明治27年	冬の部	箱根越えて灯ともす村のしぐれける	時雨	天文
188	明治27年	冬の部	落潮のいさり火遠くしぐれけり	時雨	天文
189	明治27年	冬の部	船千艘しぐれて暮るゝ港かな	時雨	天文
190	明治27年	冬の部	大方はしくれて衛士の篝かな	時雨	天文
191	明治27年	冬の部	木枯の海山暮れて静かなり	凧	天文
192	明治27年	冬の部	鶏なくや霜の晨の村外れ	霜	天文
193	明治27年	冬の部	霜白し十萬軒の鬼瓦	霜	天文
194	明治27年	冬の部	霜の夜の狐鳴くなり多賀の城	霜	天文
195	明治27年	冬の部	霜白し上人帰る嵯峨の奥	霜	天文
196	明治27年	冬の部	霜の荒野灯残る村のつゞきける	霜	天文
197	明治27年	冬の部	霜きら / \ 朝賀の車つゞきける	霜	天文
198	明治27年	冬の部	月きら / \ 龍湖の氷音もなし	氷	天文
199	明治27年	冬の部	すさましや氷さけたる外がはま	氷	天文
200	明治27年	冬の部	谷底に猪死で氷りける	氷	天文
201	明治27年	冬の部	雪折れの竹の大藪すさまじや	雪折れ	植物
202	明治27年	冬の部	雪の夜を月下の駒の見えずなり	雪	天文
203	明治27年	冬の部	上苑に鶴なく霜のあしたかな	霜	天文
204	明治27年	冬の部	雪の夜や峰を隔てゝ人の声	雪	天文
205	明治27年	冬の部	一山の木魚絶えたり夜の雪	雪	天文
206	明治27年	冬の部	あけぼのや雪の松原馬じるし	雪	天文
207	明治27年	冬の部	冬籠密柑の皮の散らばりぬ	冬籠	人事
208	明治27年	冬の部	冬籠麓の村の鶏の声	冬籠	人事
209	明治27年	冬の部	東路に尼ひとり泣く炬燵かな	炬燵	人事
210	明治27年	冬の部	京の人の文かいてゐる炬燵かな	炬燵	人事
211	明治27年	冬の部	老僧の火桶抱へて眠りける	火桶	人事
212	明治27年	冬の部	吾妹子の袖口赤き火桶かな	火桶	人事
213	明治27年	冬の部	炭がまや昔ながらの八瀬の奥	炭がま	人事
214	明治27年	冬の部	侍の臍あらはなる蒲團かな	蒲團	人事
215	明治27年	冬の部	紙衣着て京に歌よむ男あり	紙衣	人事
217	明治27年	冬の部	頭巾脱いて萬歳謠ふ翁かな	頭巾	人事
218	明治27年	冬の部	旗竿の一段高し冬木立	冬木	植物
219	明治27年	冬の部	うつくしや枯木の中の日の御旗	枯木	植物
220	明治27年	冬の部	裏町や干菜の軒の日のみ旗	干菜	人事
221	明治27年	冬の部	井戸端の大根白き寒さかな	寒さ	時候
222	明治27年	冬の部	角灯の谷中を通る寒さかな	寒さ	時候
223	明治27年	冬の部	竹揺れて湖上の星の寒さかな	寒さ	時候
224	明治27年	冬の部	霜やけの手を并べたる寺子哉	霜焼	人事
225	明治27年	冬の部	狼の水にかゞむや冬の月	冬の月	天文
226	明治27年	冬の部	冬の月鳥居をくゞる狂女哉	冬の月	天文
227	明治27年	冬の部	大比叡の雲脚はやし冬の月	冬の月	天文
228	明治27年	冬の部	車去て都大路の月さむし	寒月	天文
229	明治27年	冬の部	殿前の羽林の鋒や冬の月	冬の月	天文
230	明治27年	冬の部	寒月の廊下を通る局かな	寒月	天文
231	明治27年	冬の部	月さむし御講の堤牛車	寒月	天文
232	明治27年	冬の部	冬されの畑に出でたり狐の子	冬ざれ	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
233	明治27年	冬の部	破巢の梢に高し冬の山	冬山	天文
234	明治27年	冬の部	鳥の糞巖に白し冬の山	冬山	天文
235	明治27年	冬の部	順礼の母に追ひつく枯野哉	枯野	天文
236	明治27年	冬の部	落葉して笥の音の細りゆく	落葉	植物
237	明治27年	冬の部	鐘樓の瓦古りにたり冬木立	冬木	植物
238	明治27年	冬の部	僧入定山茶花一枝こぼれける	山茶花	植物
239	明治27年	冬の部	山茶花のほろ / \ と散る伽藍かな	山茶花	植物
240	明治27年	冬の部	むさし野の尾花枯れたり月われたり	枯芒	植物
241	明治27年	冬の部	尾花枯れて月落る野の果もなし	枯芒	植物
242	明治27年	冬の部	舟去て古渡の枯芦暮れにける	枯蘆	植物
243	明治27年	冬の部	草枯れて土手の夕日の力なし	草枯	植物
244	明治27年	冬の部	からかきの縁に散らばる苔屋哉	蛎	動物
245	明治27年	冬の部	月更けて水鳥もなし加茂川原	水鳥	動物
246	明治27年	冬の部	漣や岩に寄來るをしニツ	鴛鴦	動物
247	明治27年	冬の部	旭さすや鴛鴦眠る石の上	鴛鴦	動物
248	明治27年	冬の部	なく千鳥傾城伽羅をたく夕	千鳥	動物
249	明治27年	冬の部	餅蜜柑吹革祭の棚黒し	吹革祭	人事
250	明治27年	冬の部	火起して吹革祭の袴かな	吹革祭	人事
251	明治27年	冬の部	行列や東海道の枯柳	枯柳	植物
252	明治27年	冬の部	大師講背戸に女の声すなり	大師講	人事
253	明治27年	冬の部	風呂吹に一山の僧居並べり	風呂吹	人事
254	明治27年	冬の部	河豚汁や机の上の普門品	河豚汁	人事
255	明治27年	冬の部	河豚汁飽くまで喰ふ女かな	河豚汁	人事
256	明治27年	冬の部	経よむや河豚喰ふたる兒もあり	河豚	動物
257	明治27年	冬の部	入る月の沖に汐吹く鯨かな	鯨	動物
258	明治27年	冬の部	大鷹の明星睨む梢かな	鷹	動物
259	明治27年	冬の部	古曆木賃の宿に残りけり	古曆	人事
260	明治27年	冬の部	赤鬚の市に出でたり年のくれ	年の暮	時候
261	明治27年	冬の部	行年を尼ひとり泣く関の宿	行年	時候
262	明治27年	冬の部	宿かりて煤掃く旅の法師かな	煤拂	人事
263	明治27年	冬の部	瘦犬の何をあさるぞ冬の村	冬	時候
265	明治27年	冬の部	死馬を引出す冬の小村かな	冬	時候
266	明治27年	冬の部	煤掃に馬引出す小家かな	煤拂	人事
267	明治27年	冬の部	行年の馬士のさげたる何魚ぞ	行年	時候
400	明治28年	冬の部	散紅葉笥斜に水細し	散紅葉	植物
401	明治28年	冬の部	水青うして兩岸の紅葉散る	散紅葉	植物
402	明治28年	冬の部	凧の終日土手を打て鳴る	凧	天文
403	明治28年	冬の部	凧や湖上の星のきらめきぬ	凧	天文
404	明治28年	冬の部	狐火のしぐれ / \ て消ゆるなり	狐火	天文
405	明治28年	冬の部	垣朽ちて我紙衾あらはなる	衾	人事
406	明治28年	冬の部	頭巾もて塞いでも見たり壁の穴	頭巾	人事
407	明治28年	冬の部	宮柱太敷立て神の留主	神の旅	人事
408	明治28年	冬の部	古沓や又古沓や霜の朝	霜	天文
409	明治28年	冬の部	きら / \ と小春の杉の梢かな	小春	時候
411	明治28年	冬の部	君がため名所旧跡時雨せん	時雨	天文
413	明治28年	冬の部	羅漢達されども寒き夜をいかむ	寒さ	時候
414	明治28年	冬の部	小夜時雨そこ行く人や誰候	時雨	天文
415	明治28年	冬の部	羽をり / \ 鴨の羽たゝく音すなり	鴨	動物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
416	明治28年	冬の部	寒月を漕ぎ帰るなり渡守	寒月	天文
417	明治28年	冬の部	初冬の取敢へず酒を買ひにけり	初冬	時候
418	明治28年	冬の部	寺子らが手を並べたる火桶かな	火桶	人事
419	明治28年	冬の部	落葉さら / \ 僧は叩く月下の門	落葉	植物
420	明治28年	冬の部	夕風や伽藍の落葉吹きまくる	落葉	植物
421	明治28年	冬の部	石壇の落葉ふみ / \ 僧かへる	落葉	植物
422	明治28年	冬の部	君見よや簀の子の落葉朽ちもせん	落葉	植物
423	明治28年	冬の部	枯蔓の梢より吹落されぬ	枯蔓	植物
424	明治28年	冬の部	哀れ菊枯れたる中の花一ツ	枯菊	植物
425	明治28年	冬の部	達磨忌や塞いで見たる壁の穴	達磨忌	人事
426	明治28年	冬の部	達磨忌や夜更けてははり壁の土	達磨忌	人事
427	明治28年	冬の部	冬枯や厠の屋根の鳥の糞	冬枯	植物
428	明治28年	冬の部	鉢叩轉べばひさご碎けなん	鉢叩	人事
429	明治28年	冬の部	鉢叩七十八と答へけり	鉢叩	人事
430	明治28年	冬の部	鉢叩たゝかで帰る時悲し	鉢叩	人事
431	明治28年	冬の部	そこ退けよ罷出でたり鉢叩	鉢叩	人事
432	明治28年	冬の部	更くる夜の瓦をすべる落葉かな	落葉	植物
433	明治28年	冬の部	つくねんと雑魚寝にもるゝ一人かな	雑魚寝	人事
434	明治28年	冬の部	あちら向きこちら向くなり年こもり	年籠	人事
435	明治28年	冬の部	年守夜せう事なしのともしかな	年籠	人事
436	明治28年	冬の部	大年の乳児這上る俵かな	大晦日	時候
437	明治28年	冬の部	人の家のいさかひやみて除夜の雨	除夜	時候
438	明治28年	冬の部	大晦日小判落した人の行く	大晦日	時候
439	明治28年	冬の部	小晦日いさゝか掃きぬ門の雪	小晦日	時候
440	明治28年	冬の部	春近き芥の上の芥かな	春近し	時候
441	明治28年	冬の部	寺男汝も春待つか立てある	春待	時候
442	明治28年	冬の部	油尽きて火消えて年流れたり	行年	時候
443	明治28年	冬の部	力なく年の梢を入る目かな	年の暮	時候
444	明治28年	冬の部	我年は下の五文字の名残かな	年の名残	時候
445	明治28年	冬の部	年一ト夜いさゝか惜しき思あり	除夜	時候
446	明治28年	冬の部	行年をうなる文よむ隣かな	行年	時候
447	明治28年	冬の部	年の暮偶々鳥が飛んでゆく	年の暮	時候
448	明治28年	冬の部	掛取に狩野の一軸を説き明かす	掛乞	人事
449	明治28年	冬の部	二三人侍衆の年わすれ	年忘	人事
450	明治28年	冬の部	二三人何を語りて年忘	年忘	人事
451	明治28年	冬の部	面白や權兵衛が宿の宵飾	門松立つ	人事
453	明治28年	冬の部	折しも時雨盗人何処を駆抜くらむ	時雨	天文
871	明治29年	冬の部	大根の引残されて拔出でたり	大根	植物
872	明治29年	冬の部	骨鳴るべく木枯の不動立ってある	凧	天文
873	明治29年	冬の部	凧の海を渡りて鞆鞆へ	凧	天文
874	明治29年	冬の部	雲黄なり江北一帯冬枯れつ	冬枯	植物
875	明治29年	冬の部	行くこと十歩にして野は枯れ天空し	枯野	天文
876	明治29年	冬の部	枯野行き尽くる處のほとり海を見る	枯野	天文
877	明治29年	冬の部	氷月夜天未黒き北氷洋	氷	天文
878	明治29年	冬の部	人も居らず鉢植の菊枯れてあり	枯菊	植物
879	明治29年	冬の部	縁先や根こぎにしたる菊枯れつ	枯菊	植物
880	明治29年	冬の部	掃溜や枯れたる中の菊の葉青み	枯菊	植物
881	明治29年	冬の部	枯菊の半刈られて半あり	枯菊	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
882	明治29年	冬の部	病む菊の此夕暮を枯れにける	枯菊	植物
883	明治29年	冬の部	菊枯れて荷馬引込む畑かな	枯菊	植物
884	明治29年	冬の部	畑中や菊二三本枯れて立つ	枯菊	植物
885	明治29年	冬の部	墓原菊も何も枯れて夕嵐	枯菊	植物
886	明治29年	冬の部	枯れたるをばたばねあげたり菊畑	枯菊	植物
887	明治29年	冬の部	菊枯れて下駄痕多き畑かな	枯菊	植物
888	明治29年	冬の部	一束の枯れし菊たよふ野川かな	枯菊	植物
889	明治29年	冬の部	墓守の枯菊を焚くべく積上げつ	枯菊	植物
890	明治29年	冬の部	原中に人を賣るなり冬の月	冬の月	天文
891	明治29年	冬の部	冬枯の城南は半ば城北は皆	冬枯	植物
892	明治29年	冬の部	凧や折れて飛散る桑の枝	凧	天文
893	明治29年	冬の部	畑中や桑冬枯れて風白く	冬枯	植物
894	明治29年	冬の部	凧の山川蒼々茫々と	凧	天文
895	明治29年	冬の部	葬かあらぬか白旗ばかり枯野くる	枯野	天文
896	明治29年	冬の部	家五六を北に見て行く枯野かな	枯野	天文
897	明治29年	冬の部	里あり家五六にして更に枯野かな	枯野	天文
898	明治29年	冬の部	握飯喰て疝氣起すべく野は枯れぬ	枯野	天文
899	明治29年	冬の部	野は枯れて小さき赤い鳥居見えつ	枯野	天文
900	明治29年	冬の部	物も云はで枯野を通る主従かな	枯野	天文
901	明治29年	冬の部	ところ／＼石ころ高き枯野かな	枯野	天文
902	明治29年	冬の部	枯野ゆけば真紅の紐の落ちてあり	枯野	天文
903	明治29年	冬の部	鶏の畔傳ひ行く小春かな	小春	時候
904	明治29年	冬の部	小春日や網干してある磯つづき	小春	時候
905	明治29年	冬の部	しぐるゝや鴉がとまる滞標	時雨	天文
906	明治29年	冬の部	汨羅あたり三閭の太夫しぐれける	時雨	天文
907	明治29年	冬の部	谷底の灯火一つしぐれける	時雨	天文
908	明治29年	冬の部	霜の陣此の夜周瑜死すと傳ふ	霜	天文
909	明治29年	冬の部	詔を階下を受くる霜夜かな	霜夜	時候
910	明治29年	冬の部	満天の雪に楚江を渡るかな	雪	天文
911	明治29年	冬の部	呉か越か雪の曙島も見えず	雪	天文
912	明治29年	冬の部	駅路や雪のあけぼの鈴の音	雪	天文
913	明治29年	冬の部	雪のあした紫の上光る君	雪	天文
914	明治29年	冬の部	天幕に李陵泣くなり冬の月	冬の月	天文
915	明治29年	冬の部	曉に匈奴出でたり雪の丘	雪	天文
916	明治29年	冬の部	營に火して單于逃げたり冬の月	冬の月	天文
917	明治29年	冬の部	寒月に將士皆泣く遺詔かな	寒月	天文
918	明治29年	冬の部	切支丹のがらすの窓や冬の月	冬の月	天文
919	明治29年	冬の部	寒月の大鋸や木挽小屋	寒月	天文
920	明治29年	冬の部	寒月の首桶并ぶ野陣かな	寒月	天文
921	明治29年	冬の部	牢内の錠音高き寒さかな	寒さ	時候
922	明治29年	冬の部	首枷に流罪の人の寒さかな	寒さ	時候
923	明治29年	冬の部	首桶の首のがたつく寒さかな	寒さ	時候
924	明治29年	冬の部	鐘樓古く一山の木葉落尽す	落葉	植物
925	明治29年	冬の部	落葉の白帝城上鴉啼く	落葉	植物
926	明治29年	冬の部	木枯や呉江に艤する三千艘	凧	天文
927	明治29年	冬の部	枯芦や石碣村の家五六	枯蘆	植物
928	明治29年	冬の部	一村は干菜つる軒日午なり	干菜	人事
929	明治29年	冬の部	苞に居てなまこ何をか夢むらん	海鼠	動物

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
930	明治29年	冬の部	東の方海に入てなまこを見たりける	海鼠	動物
931	明治29年	冬の部	覇業未だ成らずなまこに恨あり	海鼠	動物
932	明治29年	冬の部	なまことは王者の道かそも覇者か	海鼠	動物
933	明治29年	冬の部	暁天に納豆打つなり媪が茶屋	納豆	人事
934	明治29年	冬の部	櫓の火や木曾の冠者の幼き	櫓	人事
935	明治29年	冬の部	櫓の火に六韜をよむ男かな	櫓	人事
936	明治29年	冬の部	櫓の火や南朝の遺臣姓は和田	櫓	人事
937	明治29年	冬の部	板額の何やら縫へる櫓火かな	櫓	人事
938	明治29年	冬の部	炭ついでしばしもくねんとしたりける	炭	人事
939	明治29年	冬の部	はり / \ と何やはねる炭火かな	炭	人事
940	明治29年	冬の部	薄衾かぶりつ / \ 苦吟かな	衾	人事
941	明治29年	冬の部	足が出て詮方もなきふとんかな	蒲團	人事
942	明治29年	冬の部	物思ひ居ればたんぼのさめやすき	湯たんぼ	人事
943	明治29年	冬の部	一人寝てたんぼさめたる夜半かな	湯たんぼ	人事
944	明治29年	冬の部	俳諧や炬燵もなく二人ゐる	炬燵	人事
945	明治29年	冬の部	あるは詩書あるは礼樂冬籠	冬籠	人事
946	明治29年	冬の部	更くる夜の裾野のあたり里かぐら	神樂	人事
947	明治29年	冬の部	鉢叩とは謠曲の名なるべく	鉢叩	人事
948	明治29年	冬の部	雪丸げ二つに割れし恨かな	雪遊び	人事
949	明治29年	冬の部	起きて見ればひとり月下の雪佛	雪達磨	人事
950	明治29年	冬の部	後向いて入定したり雪佛	雪達磨	人事
951	明治29年	冬の部	雪佛に簞笠きせて笑ひける	雪達磨	人事
952	明治29年	冬の部	案山子にも似て哀れなり雪佛	雪達磨	人事
953	明治29年	冬の部	胡兒驕る塞上塞下の吹雪かな	吹雪	天文
954	明治29年	冬の部	士卒五千匈奴に降る吹雪哉	吹雪	天文
955	明治29年	冬の部	勅をきいて一軍振ふあられかな	霰	天文
956	明治29年	冬の部	早打の輿に打込む霰かな	霰	天文
957	明治29年	冬の部	徳利もてば霰はね返る野道かな	霰	天文
958	明治29年	冬の部	江を渡り中流にして霰かな	霰	天文
959	明治29年	冬の部	瀧壺に氷柱見上るあしたかな	垂氷	天文
960	明治29年	冬の部	尼若くつらゝを折て棄てにける	垂氷	天文
961	明治29年	冬の部	染物の紫も朱もつらゝかな	垂氷	天文
962	明治29年	冬の部	有明や田毎 / \ のうす氷	薄氷	地理
963	明治29年	冬の部	紅といた皿の中なる氷かな	氷	天文
964	明治29年	冬の部	薄氷に紅こぼしたる女かな	薄氷	地理
965	明治29年	冬の部	張りつめし氷の中の巖かな	氷	天文
966	明治29年	冬の部	鷹の子や越の海岸岩多き	鷹	動物
967	明治29年	冬の部	たか狩や日暮れて帰る左賢王	鷹狩	人事
968	明治29年	冬の部	乾坤は正に五更の氷かな	氷	天文
969	明治29年	冬の部	君に侑む世に乾鮭もまた風流	乾鮭	人事
970	明治29年	冬の部	よき人の笑ませ給ふや薬くひ	薬喰	人事
971	明治29年	冬の部	薬喰頻りに客にすゝめける	薬喰	人事
972	明治29年	冬の部	薬喰を見てゐる妻の美しくしき	薬喰	人事
973	明治29年	冬の部	薬喰すべく火を焚く古廟かな	薬喰	人事
974	明治29年	冬の部	薬には狸なんどもよかるべく	狸	動物
975	明治29年	冬の部	狸なんど下司の喰ふべきものなるぞ	狸	動物
976	明治29年	冬の部	薬喰ひて大の字に寐たる男哉	薬喰	人事
977	明治29年	冬の部	麾下の士が公の愛馬を薬喰ひ	薬喰	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
978	明治29年	冬の部	薬喰ふて鍋かぶりたる法師かな	薬喰	人事
979	明治29年	冬の部	あかざりに墨つけて見る寺子かな	靱	人事
980	明治29年	冬の部	水鼻やひとり遺文をよむ灯下	水鼻	人事
981	明治29年	冬の部	雪沓や幼きものは主なるべく	雪沓	人事
982	明治29年	冬の部	鷺直に雪車乗下ろす谷間哉	雪舟	人事
983	明治29年	冬の部	師走八日雪ふれば寒き日なりける	師走	時候
984	明治29年	冬の部	寒垢離や入れずみしたる大男	寒垢離	人事
985	明治29年	冬の部	月西へ寒念佛の鉦遠くなり	寒念佛	人事
986	明治29年	冬の部	あれ聞けよ宿るべき村の寒念佛	寒念佛	人事
987	明治29年	冬の部	肉さげて魯智深なるべく寒ね佛	寒念佛	人事
988	明治29年	冬の部	豆打て何やら唱ふひとりもの	豆まき	人事
989	明治29年	冬の部	煤掃かんと大黒抱く男かな	煤拂	人事
990	明治29年	冬の部	掃けど / \ 不動御像煤びたる	煤拂	人事
991	明治29年	冬の部	せんなしや乳児這出づる煤掃ひ	煤拂	人事
992	明治29年	冬の部	煤掃に軍歌を唱ふ隣の子	煤拂	人事
993	明治29年	冬の部	煤掃に如來の腕の欠けが出る	煤拂	人事
994	明治29年	冬の部	京の六右エ門殿とやら節季候	節季	時候
995	明治29年	冬の部	此あたりに隠れもない節季候にて候	節季	時候
996	明治29年	冬の部	年の市に組板叩く男かな	年の市	人事
997	明治29年	冬の部	立て話す京の男や年の市	年の市	人事
998	明治29年	冬の部	うき人の古曆見て居たりける	古曆	人事
999	明治29年	冬の部	寄合ふて年忘する木賃かな	年忘	人事
1000	明治29年	冬の部	鶏啼いて師走とも見えぬ小村かな	師走	時候
1001	明治29年	冬の部	二三疋師走の村の犬吠えぬ	師走	時候
1002	明治29年	冬の部	年の暮劉備筵を織て居る	年の暮	時候
1003	明治29年	冬の部	行年に何の書をよむ子房ぞも	行年	時候
1004	明治29年	冬の部	狐落す咒文高らかに年の暮	年の暮	時候
1005	明治29年	冬の部	臘八や里に啼く日は里鴉	臘八	人事
1006	明治29年	冬の部	餅の村にわが宿るべき村もなし	餅	人事
10650	明治29年	冬の部	鉢植の菊枯れて縁にころがりぬ	菊枯れ	植物
1627	明治30年	冬の部	湯婆温めて母にまゐらす看護哉	湯たんぼ	人事
1628	明治30年	冬の部	蒲團重くしはぶき苦し夜中頃	蒲團	人事
1629	明治30年	冬の部	薬より更に湯婆を愛すかな	湯たんぼ	人事
1630	明治30年	冬の部	病む母に配られし衣見せ申す	衣配	人事
1631	明治30年	冬の部	市に住んで医者に閑あり年の暮	年の暮	時候
1632	明治30年	冬の部	一村に疫あり餅の音もなし	餅	人事
1633	明治30年	冬の部	雑魚寐して風を引いたる男かな	雑魚寝	人事
1634	明治30年	冬の部	煤掃にはき出されたる病者かな	煤拂	人事
1635	明治30年	冬の部	仇は獲ず従者は病みぬ年のくれ	年の暮	時候
1636	明治30年	冬の部	神の留守病を呪ふすべをなみ	神の旅	人事
1637	明治30年	冬の部	我に疝氣炉を開くこと早かりし	爐開	人事
1638	明治30年	冬の部	時雨小集あるじの病を慰めつ	時雨	天文
1639	明治30年	冬の部	遂に起たず夜半風遠く鳴る	凧	天文
1640	明治30年	冬の部	病癒えて未だ枯れざる菊を見る	菊	植物
1641	明治30年	冬の部	山茶花や年若き僧心をやむ	山茶花	植物
1642	明治30年	冬の部	寒に中り越路に逗留すと文す	寒さ	時候
1643	明治30年	冬の部	二人まで疫に死したり年のくれ	年の暮	時候
1644	明治30年	冬の部	湯治場に冬籠しつ京の人	冬籠	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1645	明治30年	冬の部	霜の陣夜もすがら金創の痛み哉	霜	天文
1646	明治30年	冬の部	風呂吹に病みたる僧の列なりし	風呂吹	人事
1647	明治30年	冬の部	只納豆汁の温きが薬なり	納豆汁	人事
1648	明治30年	冬の部	千鳥きく我に戀あり病あり	千鳥	動物
1649	明治30年	冬の部	戀に病める海鼠もあらむ苞の中	海鼠	動物
1650	明治30年	冬の部	疫の家に豆打つ声の聞ゆなり	豆まき	人事
1651	明治30年	冬の部	ひとりものゝ病むで四五人年ごもり	年籠	人事
1652	明治30年	冬の部	旅に病むで暦の末を恨むかな	古暦	人事
1653	明治30年	冬の部	懸乞の骨折きたる群集かな	掛乞	人事
1654	明治30年	冬の部	凧に金創の薬を賣つてゐる	凧	天文
1655	明治30年	冬の部	病床に冬の夕日のすこしさす	冬	時候
1656	明治30年	冬の部	病院の窓に物干す小春哉	小春	時候
1657	明治30年	冬の部	小盗人の病むで粥喰ふ櫓火かな	櫓	人事
1658	明治30年	冬の部	捕はれて盗の婦となりつ薬喰	薬喰	人事
1659	明治30年	冬の部	玄関に火鉢を遠み薬取	火鉢	人事
1660	明治30年	冬の部	急病や十夜の戻りさはがしき	十夜	人事
1661	明治30年	冬の部	外科室に器械并べる寒さ哉	寒さ	時候
1662	明治30年	冬の部	薬喰すべく約成る木賃かな	薬喰	人事
1663	明治30年	冬の部	傷寒を醫者の争ふ師走哉	師走	時候
1665	明治30年	冬の部	一家中足袋はくことを許されず	足袋	人事
1666	明治30年	冬の部	草庵や時雨吹込む翁の像	時雨	天文
1668	明治30年	冬の部	朝の程西にたまりし落葉哉	落葉	植物
1669	明治30年	冬の部	岨下に落葉吹込む薄暗し	落葉	植物
1670	明治30年	冬の部	曉に落葉の森を流人かな	落葉	植物
1671	明治30年	冬の部	暮れんとして落葉が岡の風急なり	落葉	植物
1672	明治30年	冬の部	庭前の落葉を掃くや翁ぶり	落葉	植物
1673	明治30年	冬の部	松原に何の落葉か吹たまる	落葉	植物
1674	明治30年	冬の部	落葉踏んで行けば頻りに猿が鳴く	落葉	植物
1675	明治30年	冬の部	草鞋軽々落葉が上を踏み心	落葉	植物
1676	明治30年	冬の部	林中の落葉をふんで夜帰る	落葉	植物
1677	明治30年	冬の部	主従の落葉焚きつくる知らぬ山	落葉	植物
1679	明治30年	冬の部	正面の坐ふとんばかり明いてゐる	蒲團	人事
1680	明治30年	冬の部	一枚のふとんかぶりし二人かな	蒲團	人事
1681	明治30年	冬の部	贈られし蒲團絹にして薄かりし	蒲團	人事
1682	明治30年	冬の部	温くもりの少し残りしふとん哉	蒲團	人事
1683	明治30年	冬の部	唐艸のふとん積上げし車かな	蒲團	人事
1684	明治30年	冬の部	かつぎ入るゝ蒲團にせまき戸口かな	蒲團	人事
1685	明治30年	冬の部	ふとん足らず其角坐に入る胡坐かな	蒲團	人事
1686	明治30年	冬の部	ふとん着てしばしが程はうずくまる	蒲團	人事
1687	明治30年	冬の部	一人寐てふとん廣きを愛すかな	蒲團	人事
1688	明治30年	冬の部	抜け出でしふとんの穴に再びす	蒲團	人事
1689	明治30年	冬の部	買はまくす蒲團の幅のやゝせまき	蒲團	人事
1690	明治30年	冬の部	他国人と年忘する湯治かな	年忘	人事
1692	明治30年	冬の部	石壇の下にたまりし落葉かな	落葉	植物
1693	明治30年	冬の部	人も來ず落葉たまりし低き縁	落葉	植物
1694	明治30年	冬の部	落葉かく弥宜が娘の年ふけし	落葉	植物
1695	明治30年	冬の部	岡の上に落葉焚き居る畑かな	落葉	植物
1696	明治30年	冬の部	うす黒く水田にたまる落葉かな	落葉	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1697	明治30年	冬の部	いつのまにか何の落葉ともわかぬかな	落葉	植物
1699	明治30年	冬の部	棒鱈の乾さけ妬む愚かな	鱈	雑
1700	明治30年	冬の部	乾鮭にかんてらの烟吹きつける	乾鮭	人事
1701	明治30年	冬の部	仕官してからさけを得つ年のくれ	年の暮	時候
1702	明治30年	冬の部	この師走乾鮭十駄市に入る	師走	時候
1703	明治30年	冬の部	二三子のからさけ割いて夜半亭	乾鮭	人事
1704	明治30年	冬の部	からさけを厨下に割ける素振あり	乾鮭	人事
1705	明治30年	冬の部	俳諧や遂にからさけに酒をおく	乾鮭	人事
1706	明治30年	冬の部	店先の乾鮭に喝す貧道心	乾鮭	人事
1707	明治30年	冬の部	からさけのいとからびたるをめづるかな	乾鮭	人事
1708	明治30年	冬の部	夜遅く乾鮭に飯喰ふ一人かな	乾鮭	人事
1709	明治30年	冬の部	他国にして人からさけをなつかしむ	乾鮭	人事
1710	明治30年	冬の部	村夫子素よりからさけを愛すあり	乾鮭	人事
1712	明治30年	冬の部	乗合の頭巾まぶかき女かな	頭巾	人事
1713	明治30年	冬の部	暗がりをちらと怪しきづきん哉	頭巾	人事
1714	明治30年	冬の部	人に嫁してづきんの色に好みあり	頭巾	人事
1715	明治30年	冬の部	二人立つづきんながら物語	頭巾	人事
1716	明治30年	冬の部	古びたる頭巾あはれむ白髪哉	頭巾	人事
1717	明治30年	冬の部	只古びたるづきんにして人は亡し	頭巾	人事
1718	明治30年	冬の部	今やうのづきんかぶりし知らぬ人	頭巾	人事
1719	明治30年	冬の部	連立て朝鮮人のづきんかな	頭巾	人事
1720	明治30年	冬の部	給はりしづきんの色のさめもせず	頭巾	人事
1721	明治30年	冬の部	取りはづしづきんあはれぬ故人かな	頭巾	人事
1722	明治30年	冬の部	人老いてづきんことやうなるを着る	頭巾	人事
1723	明治30年	冬の部	相別るゝこと十年づきんなつかしき	頭巾	人事
1724	明治30年	冬の部	さし出でゝづきん見にくき男かな	頭巾	人事
1726	明治30年	冬の部	曾れらしきづきんを着たる人もなし	頭巾	人事
1728	明治30年	冬の部	佛のづきん目につくゆがみかな	頭巾	人事
1730	明治30年	冬の部	あのやうにづきんの曲がむ人なりし	頭巾	人事
1732	明治30年	冬の部	押入に乾さけ藏す易者かな	乾鮭	人事
1733	明治30年	冬の部	髭なきが師走の市にトを賣る	師走	時候
1734	明治30年	冬の部	かみくらに易者据ゑたる十夜哉	十夜	人事
1735	明治30年	冬の部	行き逢ひし醫者と易者のづきん哉	頭巾	人事
1736	明治30年	冬の部	白鹿を見たりト者を訪ふ道に	鹿	動物
1737	明治30年	冬の部	醫者ト者日向に對す冬至かな	冬至	時候
1738	明治30年	冬の部	日南す易者が門の帰花	歸り花	植物
1739	明治30年	冬の部	トを賣る門にあやしき木實哉	木の實	植物
1740	明治30年	冬の部	医ト對坐して冬至の目があたる	冬至	時候
1741	明治30年	冬の部	落葉さつと賣ト先生吹かれ兒	落葉	植物
1742	明治30年	冬の部	今猶在り银杏落葉して賣ト郎	落葉	植物
1743	明治30年	冬の部	諸木落ちてト者社頭を去る夕	落葉	植物
1744	明治30年	冬の部	落葉して賣トの床几移したる	落葉	植物
1745	明治30年	冬の部	賣トの床几移しゝ小春かな	小春	時候
1746	明治30年	冬の部	トを賣り居れば银杏の落葉かな	落葉	植物
1747	明治30年	冬の部	大道や理髮師に隣る賣ト師	雑	雑
1748	明治30年	冬の部	賣ト師を中に银杏の落葉かな	落葉	植物
1749	明治30年	冬の部	トして吉鱸釣らんと出でゝ行く	鱸	動物
1750	明治30年	冬の部	行年を貧にしてト吉なりし	行年	時候

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1751	明治30年	冬の部	笠竹に霰落來る社頭かな	霰	天文
1752	明治30年	冬の部	冬枯のト者小家す土手の下	冬枯	植物
1753	明治30年	冬の部	冬枯や賣トの旗に日が當る	冬枯	植物
1755	明治30年	冬の部	藥喰到れば少し後れたる	藥喰	人事
1756	明治30年	冬の部	聴法の人さまノに凍えたる	凍る	天文
1757	明治30年	冬の部	狐落ちて銀杏の落葉握り居る	落葉	植物
1758	明治30年	冬の部	梁に狂女笑へり冬の月	冬の月	天文
1760	明治30年	冬の部	冬籠るべくとして南向きなるよ	冬籠	人事
1761	明治30年	冬の部	枯葛の恨みんよしもあらぬ戀	枯葛	植物
1762	明治30年	冬の部	麦蒔くべく日和嬉しき朝出かな	麦蒔	人事
1763	明治30年	冬の部	家に物の古曆なんど申すなき	古曆	人事
1764	明治30年	冬の部	きれノや冬田をはしる雲の影	冬田	天文
1765	明治30年	冬の部	炭小屋に炭なくて冬の月がさす	雑	雑
1767	明治30年	冬の部	煤掃かんとちよと移したり鉢の梅	煤拂	人事
1768	明治30年	冬の部	煤掃の寒梅庭の彼方かな	煤拂	人事
1769	明治30年	冬の部	煤掃に箆を叩く夫婦かな	煤拂	人事
1770	明治30年	冬の部	憤ふらく煤なんど掃いて何かせん	煤拂	人事
1771	明治30年	冬の部	すゝはきに土器碎き発心す	煤拂	人事
1772	明治30年	冬の部	大黒の煤びたるを掃き奉る	煤拂	人事
1773	明治30年	冬の部	一ト處掃き残したる煤悲し	煤拂	人事
1774	明治30年	冬の部	煤掃に什器こわしゝ婢を罪す	煤拂	人事
1775	明治30年	冬の部	煤掃に嵐吹き込む一トしきり	煤拂	人事
1776	明治30年	冬の部	煤掃やせんすべ知らぬひとりもの	煤拂	人事
1777	明治30年	冬の部	神の子の不具なるはこの海鼠哉	海鼠	動物
1778	明治30年	冬の部	浦の昔海鼠化けたる嘶かな	海鼠	動物
1779	明治30年	冬の部	魚河岸に出會ふ他国の海鼠哉	海鼠	動物
1781	明治30年	冬の部	道にして湯婆さめなんこと悲し	湯たんぼ	人事
1782	明治30年	冬の部	おくるべく君に湯婆を温めし	湯たんぼ	人事
1783	明治30年	冬の部	獵犬の面もふらず霰かな	霰	天文
1784	明治30年	冬の部	雪の夜や犬くゝとなく庫裡の方	雪	天文
1785	明治30年	冬の部	獵犬の門守るべく老いしかな	狩	人事
1787	明治30年	冬の部	冬ごもり後ろに近きえぞが鳶	冬籠	人事
1789	明治30年	冬の部	蕪引大根引とは異にして	雑	雑
1791	明治30年	冬の部	梅一枝早きに過ぎし年の暮	年の暮	時候
1792	明治30年	冬の部	風呂吹の味噌を分つや年忘れ	年忘	人事
1794	明治30年	冬の部	沖の方時に鳴動す年の暮	年の暮	時候
1796	明治30年	冬の部	富士少し見ゆる嬉しき冬籠	冬籠	人事
1798	明治30年	冬の部	戦さやんでありなれの水臙ろなり	臙	天文
1800	明治30年	冬の部	戀十五十八椰子の月涼し	涼し	時候
1802	明治30年	冬の部	耶蘇の墓に四月の花の赤きかな	四月	時候
1804	明治30年	冬の部	菩提樹下昼寐さめたる男かな	晝寝	人事
1806	明治30年	冬の部	雁をきく萬里長城以北かな	雁	動物
1808	明治30年	冬の部	凧の鐵笛鳴て日は暮れぬ	凧	天文
1810	明治30年	冬の部	鯛と申す魚なり冬籠	冬籠	人事
1846	明治31年	冬の部	寐ぬる頃少し残りし炭火かな	炭	人事
1847	明治31年	冬の部	籠もりて炭の粉少しこぼれける	炭	人事
1848	明治31年	冬の部	炭小屋に吹雪積りし隙間哉	炭	人事
1849	明治31年	冬の部	ぬかるみに炭俵埋む戸口哉	炭俵	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1850	明治31年	冬の部	戸を推せば嵐吹込む炭火哉	炭	人事
1851	明治31年	冬の部	青白く炭小屋焼けし焰かな	炭	人事
1852	明治31年	冬の部	客去て炭火徒らに熾なる	炭	人事
1853	明治31年	冬の部	日雇の地に炭火して朝寒き	朝寒	時候
1854	明治31年	冬の部	三伏に鉄を鍛ゆる炭火かな	三伏	時候
1855	明治31年	冬の部	炭とりの底はたきけり梅の花	梅	植物
1856	明治31年	冬の部	壇上に咒文荒く壇下に炭火さかん	炭	人事
1857	明治31年	冬の部	焼跡の炭火となりし夜明かな	炭	人事
1858	明治31年	冬の部	活火炉上更に一簣の炭を投ず	炭	人事
1859	明治31年	冬の部	客もなき診断の間の炭火かな	炭	人事
1860	明治31年	冬の部	小屋の前の粉炭に霰散乱す	霰	天文
1861	明治31年	冬の部	搔きまはし搔きまはせども炭火なし	炭	人事
1862	明治31年	冬の部	吹き止めバ次第に消ゆる炭火かな	炭	人事
1863	明治31年	冬の部	それ鷹の虚空をつかむ怒かな	鷹	動物
1864	明治31年	冬の部	王若く鷹を好みてしば／＼す	鷹	動物
1865	明治31年	冬の部	寒むがるを抱きすくめつゝ湯に入れし	寒さ	時候
1866	明治31年	冬の部	湯屋を出てちょこ／＼走りさむき風	寒さ	時候
1867	明治31年	冬の部	湖南より湖北に達す氷かな	氷	天文
1868	明治31年	冬の部	明方の氷屢々響あり	氷	天文
1869	明治31年	冬の部	大根の引くべかりしを盗まれし	大根	植物
1870	明治31年	冬の部	うき人の引きわづらへる大根哉	大根	植物
1872	明治31年	冬の部	宰相を罵て時雨の山に入る	時雨	天文
1873	明治31年	冬の部	頭巾着て逢恋すべく羞かしき	頭巾	人事
1875	明治31年	冬の部	吾が頭巾人の頭巾に似て非なり	頭巾	人事
1877	明治31年	冬の部	吾が頭巾浮世のさまに似ずもがな	頭巾	人事
1878	明治31年	冬の部	水樓や千鳥月夜を郎かへる	千鳥	動物
1879	明治31年	冬の部	客を留め鳴かぬ千鳥や茶の烟	千鳥	動物
1880	明治31年	冬の部	川隈の闇に鳴きゆく千鳥かな	千鳥	動物
1881	明治31年	冬の部	小夜千鳥博多小女郎浪枕	千鳥	動物
1882	明治31年	冬の部	水に沈む廻廊の灯や鳴千鳥	千鳥	動物
1883	明治31年	冬の部	千鳥きいて泣く人もあらむ今時分	千鳥	動物
1884	明治31年	冬の部	千鳥も見えず夜の霜ふる川原哉	千鳥	動物
1885	明治31年	冬の部	川尻や丑満近く千鳥鳴く	千鳥	動物
1886	明治31年	冬の部	わかき男女とはしる千鳥鳴く	千鳥	動物
1887	明治31年	冬の部	陣門に犬吠ゆ冬の月三更	冬の月	天文
1888	明治31年	冬の部	賞もあらず鷹を見てゐる犬愚也	鷹	動物
1889	明治31年	冬の部	群犬やいくさの跡の冬の月	冬の月	天文
1890	明治31年	冬の部	杳兵衛が麦ま支にゆけば犬も行く	麦蒔	人事
1891	明治31年	冬の部	鬨犬や街道の雪に血を印す	雪	天文
1892	明治31年	冬の部	老いし犬の寒夜の門をまもり居る	寒夜	時候
1894	明治31年	冬の部	鶏の尾の雫となりしみぞれかな	雫	天文
1895	明治31年	冬の部	音もなくみぞれふるなり杉木立	雫	天文
1896	明治31年	冬の部	帆重くみぞれとなりし船出かな	雫	天文
1897	明治31年	冬の部	山腹はみぞれにして山麓は雨	雫	天文
1898	明治31年	冬の部	みぞれしばししたゝかの雨となりけるよ	雫	天文
1899	明治31年	冬の部	乗合の合羽の上のみぞれかな	雫	天文
1900	明治31年	冬の部	雨かあらず雪かあらず乃ち雫かな	雫	天文
1901	明治31年	冬の部	塀側をみぞれ吹いて寒菊わなゝきぬ	雫	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1902	明治31年	冬の部	みぞれ一ト日ふみ切らしたる草鞋かな	霰	天文
1903	明治31年	冬の部	寒き日のみぞれにして暮れにけり	霰	天文
1904	明治31年	冬の部	鞍壺に霰を拂ふ合羽かな	霰	天文
1905	明治31年	冬の部	傘を傾けつみぞれを滑べらかす	霰	天文
1906	明治31年	冬の部	杉の葉のみぞれ解けずして氷りけり	霰	天文
1907	明治31年	冬の部	生垣にみぞるゝ音す夫帰る	霰	天文
1908	明治31年	冬の部	寄席を出て風斜なる霰かな	霰	天文
1910	明治31年	冬の部	七十年身に病なし冬ごもり	冬籠	人事
1911	明治31年	冬の部	貢献の白象寒に病むで死す	寒	時候
1912	明治31年	冬の部	卷帙乱れ散て水仙花咲きぬ	水仙	植物
1913	明治31年	冬の部	虫の氣の姫に冊つき夜の長き	夜長	時候
1914	明治31年	冬の部	かりそめの風の心地を秋の行く	行秋	時候
1915	明治31年	冬の部	玉欄に病む目眩ゆき牡丹哉	牡丹	植物
1916	明治31年	冬の部	病むちごの屢魔はれつ明やすき	短夜	時候
1917	明治31年	冬の部	蹇の蚊帳より縁に這出でし	蚊帳	人事
1918	明治31年	冬の部	蚤に蚊に物狂はしき病かな	雑	雑
1919	明治31年	冬の部	蚊柱や疫の小村の鉦の音	蚊	動物
1920	明治31年	冬の部	病眼に梅猶寒き社前哉	梅	植物
1921	明治31年	冬の部	梅咲くや痘ありぬべく赤き注連	梅	植物
1922	明治31年	冬の部	人病むで吟骨梅の如く瘦す	梅	植物
1923	明治31年	冬の部	戀すべく蹇の猫あはれな里	猫の戀	動物
2463	明治31年	冬の部	故里ははや初冬の庭さびし	初冬	時候
2465	明治31年	冬の部	野の店の葱畑や朝の月	葱	植物
2466	明治31年	冬の部	俎板や葱に月さす臺所	葱	植物
2467	明治31年	冬の部	黒土や葱掘る背戸の霜柱	雑	雑
2468	明治31年	冬の部	庖丁やさつと迸る葱の香	葱	植物
2469	明治31年	冬の部	市に買ひし一抱の葱の長短	葱	植物
2470	明治31年	冬の部	清流に葱長きを洗ひけり	葱	植物
2471	明治31年	冬の部	葱の香やあつものを吹く卓の上	葱	植物
2472	明治31年	冬の部	葱味噌の小皿や朝の飯あつし	葱	植物
2473	明治31年	冬の部	行灯やひとりト者の葱を煮る	葱	植物
2474	明治31年	冬の部	ひともじの葎さを厭ふ女か那	葱	植物
2475	明治31年	冬の部	朝川に葱の屑を流しけり	葱	植物
2476	明治31年	冬の部	葱さげて貧乏町や星明り	葱	植物
2477	明治31年	冬の部	撰りわけて葱水仙に似たるか那	葱	植物
2478	明治31年	冬の部	大根といつれか白き葱か那	雑	雑
2479	明治31年	冬の部	居酒屋の葱かんばしく酔多し	葱	植物
2480	明治31年	冬の部	大江に葱を洗ふ舟の月	葱	植物
2481	明治31年	冬の部	塊や青きが長き葱畑	葱	植物
2482	明治31年	冬の部	葱さがす厨の偶や干からびし	葱	植物
2483	明治31年	冬の部	旭のすくや木立に隣る葱畑	葱	植物
2484	明治31年	冬の部	洗はざる葱買ふて山に帰る哉	葱	植物
2486	明治31年	冬の部	煮凍や日脚さし込む舟の窓	煮凝	人事
2487	明治31年	冬の部	いさゝかの煮凍さがす灯か那	煮凝	人事
2488	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐をさびと申すべく	煮凝	人事
2489	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐かみたる単か那	煮凝	人事
2490	明治31年	冬の部	煮凍の小鍋温む炭貧し	煮凝	人事
2491	明治31年	冬の部	二三子や煮凍わかつ熟の朝	煮凝	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2492	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐俳諧の小酒もり	煮凝	人事
2493	明治31年	冬の部	煮凍の鍋の火を吹く妻もなし	煮凝	人事
2494	明治31年	冬の部	片偶や煮凍の鍋物うくて	煮凝	人事
2495	明治31年	冬の部	兀として煮凍とかす土鍋か那	煮凝	人事
2496	明治31年	冬の部	汁うすく煮凍の葱白し	煮凝	人事
2497	明治31年	冬の部	粟飯に煮凍の狸をすゝめけり	煮凝	人事
2498	明治31年	冬の部	煮凍や物かぶせたる河豚鍋	煮凝	人事
2499	明治31年	冬の部	煮凍の狸なんどや火のいぶる	煮凝	人事
2500	明治31年	冬の部	煮凍の肉喰ひ去る盗人か那	煮凝	人事
2501	明治31年	冬の部	煮凍の熊のしゝむら火明か	煮凝	人事
2503	明治31年	冬の部	浦島が子も来合はして夷講	夷講	人事
2504	明治31年	冬の部	裏町は菖菟賣りや夷講	夷講	人事
2505	明治31年	冬の部	難船や人数駆出す夷講	夷講	人事
2506	明治31年	冬の部	既にして相撲取も見えつ夷講	夷講	人事
2507	明治31年	冬の部	大風の吹く夜なるか那夷講	夷講	人事
2508	明治31年	冬の部	夷講あるは狐にばかされつ	夷講	人事
2509	明治31年	冬の部	見知らぬが袴むづかし夷講	夷講	人事
2510	明治31年	冬の部	袴着て夷講中物めかす	夷講	人事
2511	明治31年	冬の部	夷講の酒酌む銀の栢杓かな	夷講	人事
2512	明治31年	冬の部	酒樽に月さし込むや夷講	夷講	人事
2514	明治31年	冬の部	禅寺をかりて翁忌の二三人	芭蕉忌	人事
2515	明治31年	冬の部	庵中の二三子庭前の枯尾花	枯芒	植物
2516	明治31年	冬の部	幾しぐれ墨うすれゆく笠の文字	時雨	天文
2517	明治31年	冬の部	わびぬれば只うづくまる翁の日	芭蕉忌	人事
2518	明治31年	冬の部	客僧の棒喫ひけり翁の日	芭蕉忌	人事
2519	明治31年	冬の部	枯れ / \て翁忌の庭の菊立てり	芭蕉忌	人事
2520	明治31年	冬の部	二百年の笠の雫や時雨の日	芭蕉忌	人事
2521	明治31年	冬の部	庵となる竹の雫や翁の像	芭蕉忌	人事
2522	明治31年	冬の部	芭蕉忌や即今天下什麼生の俳	芭蕉忌	人事
2523	明治31年	冬の部	二三子去て翁の像と相對す	芭蕉忌	人事
2525	明治31年	冬の部	鹿笛に草の戦ぎや落つる月	鹿	動物
2526	明治31年	冬の部	仇草と刈棄てられし小菊か那	菊	植物
2527	明治31年	冬の部	露草の露月草の月の庭	露草	植物
2528	明治31年	冬の部	秋風や草にからまる殻角大豆	秋の風	天文
2529	明治31年	冬の部	秋草の中に障子や絵師か家	秋の草	植物
2530	明治31年	冬の部	光琳の秋草画く日和か那	秋の草	植物
2531	明治31年	冬の部	草枯や入江に映る暮の雲	草枯	植物
2532	明治31年	冬の部	草すこし螢入れたるがらす哉	螢	動物
2533	明治31年	冬の部	藥草の谷かんばしき春日哉	春日	時候
2534	明治31年	冬の部	日のあたる汀の草やうす氷	薄氷	地理
2535	明治31年	冬の部	草市の草の匂ひや水を打つ	草市	人事
2536	明治31年	冬の部	下草のあるは黄色の花をつく	草花	植物
2537	明治31年	冬の部	紅葉鮒草につらぬき帰るなり	紅葉鮒	動物
2538	明治31年	冬の部	草花や障子古びし絵師が家	草花	植物
2539	明治31年	冬の部	鬪て草の実こぼす雄鷄か那	草の實	植物
2540	明治31年	冬の部	銀杏の草に落ちしが多かりし	銀杏	植物
2541	明治31年	冬の部	草敷いて鮎并べたり舟の中	鮎	動物
2542	明治31年	冬の部	力草吹散らす鷹の羽風か那	鷹	動物

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2544	明治31年	冬の部	越調や客筑を撃つ冬の月	冬の月	天文
2545	明治31年	冬の部	ぬくもりや湯婆抱いたる夢心	湯たんぼ	人事
2547	明治31年	冬の部	鳳輦や十月寒花日は南	十月	時候
2548	明治31年	冬の部	小園や冬の日影のこぼれさす	冬日	天文
2549	明治31年	冬の部	谷間の冬の朝日や閑伽をくむ	冬の朝	時候
2550	明治31年	冬の部	閒庭や少し見得たる茶の茗	茶の花	植物
2551	明治31年	冬の部	凧や又洗ふ水の進しり	凧	天文
2552	明治31年	冬の部	明方を神いますべき雲の行方哉	神の旅	人事
2553	明治31年	冬の部	木菟や凝然として晝の月	木菟	動物
2554	明治31年	冬の部	主従に粥まゐらす櫓火哉	櫓	人事
2556	明治31年	冬の部	又字刻す寒月の碑や泉岳寺	寒月	天文
2558	明治31年	冬の部	小春日や動物園の禽の声	小春	時候
2560	明治31年	冬の部	珍草や霜に花咲く植物園	霜	天文
2562	明治31年	冬の部	寒月や舟に見上るお茶の水	寒月	天文
2564	明治31年	冬の部	菜屑多き神田の市や年のゆく	行年	時候
2566	明治31年	冬の部	女多き銀坐通りや枯柳	枯柳	植物
2568	明治31年	冬の部	深川や二三子さそふ翁の日	芭蕉忌	人事
2570	明治31年	冬の部	大根や四谷街道朝車	大根	植物
2572	明治31年	冬の部	寺多き牛込の奥の冬至哉	冬至	時候
2574	明治31年	冬の部	為めに壇を築く九州探題の生海鼠	海鼠	動物
2576	明治31年	冬の部	泥舟に木葉散るなりお茶の水	木葉	植物
2578	明治31年	冬の部	相を罷めし早稲田の邸の木葉哉	木葉	植物
2580	明治31年	冬の部	寒菊に冬静なる離宮哉	冬	時候
2582	明治31年	冬の部	加賀殿のお屋敷跡や冬木立	冬木	植物
2584	明治31年	冬の部	冬枯の日は斜きぬ花やしき	冬枯	植物
2586	明治31年	冬の部	鼠小僧の墓に物いふ寒夜哉	寒夜	時候
2588	明治31年	冬の部	狸穴に近く家しぬ納豆賣	納豆	人事
2590	明治31年	冬の部	凧や蛸殻町の人だかり	凧	天文
2592	明治31年	冬の部	小春日の銀座通や絵草紙屋	小春	時候
2594	明治31年	冬の部	水鳥に松の雫の吹散りぬ	水鳥	動物
2595	明治31年	冬の部	水鳥の見えずなりけり沼の月	水鳥	動物
2596	明治31年	冬の部	水鳥の啼立つ芦の枯葉かな	水鳥	動物
2597	明治31年	冬の部	水鳥の浮いて来るなり波朝日	水鳥	動物
2598	明治31年	冬の部	水鳥の啼く方寒し土手の月	水鳥	動物
2599	明治31年	冬の部	美しき水鳥浮ぶ御講か那	水鳥	動物
2600	明治31年	冬の部	水鳥や風に柳の枯れ尽す	水鳥	動物
2601	明治31年	冬の部	水鳥や篷に顔出す舟の月	水鳥	動物
2602	明治31年	冬の部	水鳥や酒買戻る舟の人	水鳥	動物
2603	明治31年	冬の部	水鳥や枯尽したる宮の森	水鳥	動物
2604	明治31年	冬の部	水鳥の啼くや古江に落つる月	水鳥	動物
2606	明治31年	冬の部	引残す大根たのもし雪の朝	大根	植物
2607	明治31年	冬の部	大根干す三戸の村や冬木立	大根	植物
2608	明治31年	冬の部	馬舟の朝川渡る大根か那	大根	植物
2609	明治31年	冬の部	大根舟に炊ぐ烟や朝月夜	大根	植物
2610	明治31年	冬の部	店先の蜜柑は黄なる大根か那	大根	植物
2611	明治31年	冬の部	沼に沿ふ大根畑や朝の月	大根	植物
2612	明治31年	冬の部	井戸端の大根の屑や薄氷	大根	植物
2613	明治31年	冬の部	清流に大根の土を洗ひけり	大根	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2614	明治31年	冬の部	大根切て水進む刀か那	大根	植物
2615	明治31年	冬の部	拔出でし大根の葉や霜どけぬ	大根	植物
2616	明治31年	冬の部	霜柱大根は引いてしまひけり	大根	植物
2617	明治31年	冬の部	中流を大根舟の流れけ里	大根	植物
2619	明治31年	冬の部	霜やけや痒きにさはる絹のきれ	霜焼	人事
2620	明治31年	冬の部	かんでらに河豚の眼の鈍きか那	河豚	動物
2621	明治31年	冬の部	入定を猶風の吹止まず	凧	天文
2622	明治31年	冬の部	暖かき初の亥の子や里帰り	亥の子	人事
2623	明治31年	冬の部	北風や村の出口の葱畑	葱	植物
2624	明治31年	冬の部	薬喰に皮羽織着たり主じ顔	薬喰	人事
2625	明治31年	冬の部	薬喰唐机など片寄せぬ	薬喰	人事
2626	明治31年	冬の部	草枯や暮の雲出る裏の山	草枯	植物
2627	明治31年	冬の部	護摩壇にしぐれのしぶく灯哉	時雨	天文
2628	明治31年	冬の部	冬の夜の厨に葱をさがし得つ	葱	植物
2629	明治31年	冬の部	柴漬の舟に小魚や午の雨	柴漬	人事
2630	明治31年	冬の部	炉開いて伯夷叔齊を思ふか那	爐開	人事
2631	明治31年	冬の部	炉開の二階に落つる日脚か那	爐開	人事
2632	明治31年	冬の部	炉開の庭に赤松偃蹇す	爐開	人事
2633	明治31年	冬の部	炉開けば秀次殿の使か那	爐開	人事
2634	明治31年	冬の部	唐様の文机を得つ炉を開く	爐開	人事
2635	明治31年	冬の部	炉開や麓の里の鶏の声	爐開	人事
2637	明治31年	冬の部	納豆買ふ町のはづれやうらなひ者	納豆	人事
2638	明治31年	冬の部	精進に納豆の苞のくさきか那	納豆	人事
2639	明治31年	冬の部	納豆賣の老いしが遅く来りけり	納豆	人事
2640	明治31年	冬の部	山寺や松風起る納豆汁	納豆汁	人事
2641	明治31年	冬の部	禅寺や納豆を叩く曉の雲	納豆	人事
2642	明治31年	冬の部	五十にして悟らぬ僧や納豆うつ	納豆	人事
2643	明治31年	冬の部	門前や納豆賣る婆子齒がぬけし	納豆	人事
2644	明治31年	冬の部	納豆賣戻るや寺の裏畑	納豆	人事
2645	明治31年	冬の部	朝曇舟に納豆を叩くか那	納豆	人事
2646	明治31年	冬の部	葱の香や熟のあしたの納豆汁	納豆汁	人事
2647	明治31年	冬の部	寺かりて連歌の会や納豆汁	納豆汁	人事
2648	明治31年	冬の部	俳諧は且つ三斛の納豆汁	納豆汁	人事
2650	明治31年	冬の部	鉢叩来る夜となりぬ寐ざめがち	鉢叩	人事
2651	明治31年	冬の部	明方や橋を越えたる鉢叩	鉢叩	人事
2652	明治31年	冬の部	乾坤を叩き尽して鉢叩	鉢叩	人事
2653	明治31年	冬の部	鉢叩風に聞えずなりにけり	鉢叩	人事
2654	明治31年	冬の部	鉢叩の妻てふものを見まほしき	鉢叩	人事
2655	明治31年	冬の部	米量る妻もありけり鉢叩	鉢叩	人事
2656	明治31年	冬の部	鉢叩昼は飯喰ふ男か那	鉢叩	人事
2657	明治31年	冬の部	子もありて悲しきものよ鉢叩	鉢叩	人事
2658	明治31年	冬の部	鉢叩二人粥喰ふ昼の宿	鉢叩	人事
2659	明治31年	冬の部	鉢叩戻れば軒の朝の月	鉢叩	人事
2660	明治31年	冬の部	鉢叩昼はひさごに潜むべし	鉢叩	人事
2661	明治31年	冬の部	鉢叩も来ぬ夜となりて冬わびし	鉢叩	人事
2662	明治31年	冬の部	鉢叩聞えずなりて夜明か那	鉢叩	人事
2663	明治31年	冬の部	交りや鉢叩に隣る納豆賣	雑	雑
2664	明治31年	冬の部	鉢叩わが妻起す戸口か那	鉢叩	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2666	明治31年	冬の部	崖の上に月落ちかゝる氷柱か那	垂氷	天文
2667	明治31年	冬の部	草庵や氷柱もさがる雪の朝	雪	天文
2668	明治31年	冬の部	洩るゝ日や氷柱の落つる杉木立	垂氷	天文
2669	明治31年	冬の部	岩山や氷柱輝く暁の星	垂氷	天文
2670	明治31年	冬の部	巖窟に氷柱見上る雫か那	垂氷	天文
2671	明治31年	冬の部	日にうとき石灯籠の氷柱か那	垂氷	天文
2672	明治31年	冬の部	水洒れて滝美しき氷柱か那	垂氷	天文
2673	明治31年	冬の部	滝壺に氷柱の下る五更か那	垂氷	天文
2674	明治31年	冬の部	金碧や氷柱の垂るゝ観音堂	垂氷	天文
2675	明治31年	冬の部	明方の岩に氷柱や滝しぶき	垂氷	天文
3663	明治32年	冬の部	さゝ鳴や山に折るべき花もなし	笹鳴	動物
3664	明治32年	冬の部	枯菊と小さき卒塔婆流れよる	枯菊	植物
3665	明治32年	冬の部	帰花咲くべくも見えぬ老木哉	歸り花	植物
3666	明治32年	冬の部	炉開に何の家例もなかりけり	爐開	人事
3667	明治32年	冬の部	よき水や大根も洗ひ葉も洗ひ	大根	植物
3668	明治32年	冬の部	茶の苔僅かに白し朝煙	茶の花	植物
3669	明治32年	冬の部	見出てる落葉の中の柘榴かな	落葉	植物
3670	明治32年	冬の部	霰うつや石の不動の鼻柱	霰	天文
3671	明治32年	冬の部	時雨るゝや舩に物煮る古き鍋	時雨	天文
3672	明治32年	冬の部	旅なれぬ若き女神もおはすらむ	神の旅	人事
3673	明治32年	冬の部	枯菊や庭に風ふく冬構	雑	雑
3674	明治32年	冬の部	埋火や既にして又かき廻す	埋火	人事
3675	明治32年	冬の部	傳來の大杯や夷子講	夷講	人事
3676	明治32年	冬の部	初氷汀は芹の葉を青み	初氷	天文
3677	明治32年	冬の部	痛棒を喫して冬の月に座す	冬の月	天文
3678	明治32年	冬の部	北風となりて小春の夕さむし	小春	時候
3679	明治32年	冬の部	炭ついで炭の粉をふく青壘	炭	人事
3680	明治32年	冬の部	傾くる笠に曇の雫かな	曇	天文
3681	明治32年	冬の部	若うして炬燵はなれぬ病かな	炬燵	人事
3682	明治32年	冬の部	亡妻の俤を見る櫓火かな	櫓	人事
3683	明治32年	冬の部	座ふとんを叩て物に激すけり	雑	雑
3684	明治32年	冬の部	鴨の毛の風に逆立つ氷かな	雑	雑
3685	明治32年	冬の部	鷹狩の同じ扮装や十二人	鷹狩	人事
3686	明治32年	冬の部	口切や庵の行事の覚書	口切	人事
3687	明治32年	冬の部	二十年昔となりし頭巾哉	頭巾	人事
3688	明治32年	冬の部	煮凍をとかせば鹿の脂哉	煮凝	人事
3689	明治32年	冬の部	二合半の酒温むる世帯かな	温め酒	人事
3690	明治32年	冬の部	顔見せや言葉通ぜぬ和蘭人	顔見世	人事
3691	明治32年	冬の部	お十夜の後世願はぬ人もなし	十夜	人事
3692	明治32年	冬の部	お妾は美人なりけり玉子酒	玉子酒	人事
3693	明治32年	冬の部	はにかむて巨燵に遠き目見え哉	炬燵	人事
3694	明治32年	冬の部	湯婆さめて悲しき事もありぬべし	湯たんぼ	人事
3695	明治32年	冬の部	律の寺山茶花の垣高うして	山茶花	植物
3696	明治32年	冬の部	をしどりの離れては又寄そひぬ	鴛鴦	動物
3697	明治32年	冬の部	神棚に巻納めけり古こよみ	古曆	人事
3698	明治32年	冬の部	善兵衛はいんでしまぬ薬喰	薬喰	人事
3699	明治32年	冬の部	年の市人に物やる切支丹	年の市	人事
3700	明治32年	冬の部	頸剃て寒かる師走八日哉	師走	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3701	明治32年	冬の部	紅筆で氷柱をそむる遊哉	垂氷	天文
3702	明治32年	冬の部	薬うりの口上手なり胼くすり	皸	人事
3703	明治32年	冬の部	頑の妻を持ちけり薬喰	薬喰	人事
3704	明治32年	冬の部	老樂やよき娘持つ網代守	網代	人事
3705	明治32年	冬の部	寒菊に炭のほこりや炭俵	寒菊	植物
3706	明治32年	冬の部	納豆汁其曉の松の風	納豆汁	人事
3707	明治32年	冬の部	寂しさや炉のなき宿の古行燈	圍爐裏	人事
3708	明治32年	冬の部	降積る雪や湯婆の湯をすつる	雪	天文
3709	明治32年	冬の部	籠にあまる葱の葉青き霰哉	霰	天文
3710	明治32年	冬の部	小夜千鳥四條渡れば祇園町	千鳥	動物
3711	明治32年	冬の部	市中に熊の肉賣るあられ哉	霰	天文
3712	明治32年	冬の部	草枯れや物に詣づる女づれ	草枯	植物
3713	明治32年	冬の部	釣干菜日の丸の旗ひるがへり	干菜	人事
3714	明治32年	冬の部	耄碌のはやらぬ頭巾きたりけり	頭巾	人事
3715	明治32年	冬の部	水鳥や城の後の古き沼	水鳥	動物
3716	明治32年	冬の部	老居士の髭の汚れや納豆汁	納豆汁	人事
3717	明治32年	冬の部	枯葦や偶々緋鯉泳き去る	枯蘆	植物
3718	明治32年	冬の部	外套の赤きをつけて猿芝居	外套	人事
3719	明治32年	冬の部	いさかひの頭巾を取るや大童	頭巾	人事
3720	明治32年	冬の部	神を思ふ心切なり神のるす	神の旅	人事
3721	明治32年	冬の部	宵々の灯火くらし冬こもり	冬籠	人事
3722	明治32年	冬の部	大徳を泊めて風呂吹参らせぬ	風呂吹	人事
3723	明治32年	冬の部	炭取を投出しけり雪の上	雪	天文
3724	明治32年	冬の部	火を起す土の火鉢や佗住居	火鉢	人事
3725	明治32年	冬の部	引っかゝる祭の旗や冬木立	冬木	植物
3726	明治32年	冬の部	熊賣の來て待つ雪の渡哉	雪	天文
3727	明治32年	冬の部	達磨忌や土の達磨の冷かに	達磨忌	人事
3728	明治32年	冬の部	風呂吹の冷えかゝりけり膳の上	風呂吹	人事
3729	明治32年	冬の部	風呂吹に口を焼いたる僧都哉	風呂吹	人事
3730	明治32年	冬の部	風呂吹を盛上にけり佛の椀	風呂吹	人事
3731	明治32年	冬の部	風呂吹の鍋をすゑたる廣間哉	風呂吹	人事
3732	明治32年	冬の部	炭焼の或夜風呂吹したりけり	雑	雑
3733	明治32年	冬の部	風呂吹の味噌残りたる小皿哉	風呂吹	人事
3734	明治32年	冬の部	風呂吹の腹の具合や酒ほしき	風呂吹	人事
3735	明治32年	冬の部	殿原の腹立兒やお鷹狩	鷹狩	人事
3736	明治32年	冬の部	鷹狩の岩山暮れて風強し	鷹狩	人事
3737	明治32年	冬の部	鷹狩や吹飛されん握めし	鷹狩	人事
3738	明治32年	冬の部	鷹狩の殿をお諫め申しけり	鷹狩	人事
3739	明治32年	冬の部	鷹狩や黄金賜る小百姓	鷹狩	人事
3740	明治32年	冬の部	鷹狩やせうとの君は文の道	鷹狩	人事
3741	明治32年	冬の部	鷹狩の白馬の人や我が敵	鷹狩	人事
3742	明治32年	冬の部	鷹狩の殿若うして短氣哉	鷹狩	人事
3743	明治32年	冬の部	鷹狩の途に出会ひし念者哉	鷹狩	人事
3744	明治32年	冬の部	鷹狩や武道を励む二少年	鷹狩	人事
3745	明治32年	冬の部	眼を睜けり生海鼠四方の志	海鼠	動物
3746	明治32年	冬の部	雪車に乗る若き女房や人の門	雪舟	人事
3747	明治32年	冬の部	小火鉢や人の女房の遠慮勝	火鉢	人事
3748	明治32年	冬の部	煤掃いて松の翠を眺めけり	煤拂	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3749	明治32年	冬の部	温石に湯婆に母の悲しかり	雑	雑
3750	明治32年	冬の部	寒声や駆落したる隣の子	寒声	人事
3751	明治32年	冬の部	花活の花のしほみや古暦	古暦	人事
3752	明治32年	冬の部	いさゝかのにくみ心や水祝	水祝	人事
3753	明治32年	冬の部	河豚喰ふて死んだ便りもなかりけり	河豚	動物
3754	明治32年	冬の部	年の内に春は立ちけり古今集	年内立春	時候
3755	明治32年	冬の部	蠟燭の既に五寸や年ごもり	年籠	人事
3756	明治32年	冬の部	茶の花や旦に荒き石の霜	茶の花	植物
3757	明治32年	冬の部	乾鮭に文字を刻まん古法帖	乾鮭	人事
3758	明治32年	冬の部	寸鉄を帯ふるものなし桃青忌	芭蕉忌	人事
3759	明治32年	冬の部	忙しの人を誘ひて年忘	年忘	人事
3760	明治32年	冬の部	乾鮭のからび果てたり春星忌	蕪村忌	人事
3761	明治32年	冬の部	北国の雪の話や薬賣	雪	天文
3762	明治32年	冬の部	笹鳴や落葉を照らす日の光	笹鳴	動物
3763	明治32年	冬の部	うつくまり寒夜の吟や影法師	寒夜	時候
3764	明治32年	冬の部	君がため岡見の憂心かな	岡見	人事
3765	明治32年	冬の部	ふし漬に大根の葉などかゝりけり	大根	植物
3766	明治32年	冬の部	餅搗の宵に返りぬ馬鹿息子	餅搗	人事
3767	明治32年	冬の部	追儼すんで蠟燭輝けり	追儼	人事
3768	明治32年	冬の部	寒月や石に當て影法師	寒月	天文
3769	明治32年	冬の部	反古に包むみかんの皮や冬坐敷	冬座敷	人事
3770	明治32年	冬の部	其まゝに死んでしまひし生海鼠哉	海鼠	動物
3771	明治32年	冬の部	神前の水氷りけり寒椿	冬椿	植物
3772	明治32年	冬の部	煮凍や梁にさす夜半の月	煮凝	人事
3773	明治32年	冬の部	大風に吹かれて去りぬ鯨うり	鯨	動物
3774	明治32年	冬の部	書出しをおいてにたるけはひ哉	掛乞	人事
3775	明治32年	冬の部	寒念佛都是女うつくしき	寒念佛	人事
3776	明治32年	冬の部	雪達摩あかつきの星と相對す	雪達磨	人事
3777	明治32年	冬の部	はねかへる鮭の市の霰かな	霰	天文
3778	明治32年	冬の部	はした女の眞赤な顔や雪つぶて	雪遊び	人事
3779	明治32年	冬の部	見せものゝけもの咆ゆるや年の市	年の市	人事
3780	明治32年	冬の部	水仙の鉢の氷や花の精	水仙	植物
3906	明治33年	冬の部	嚴霜や筋骨痛き座禪石	霜	天文
3907	明治33年	冬の部	霜ふるや夜半の潮平かに	霜	天文
3908	明治33年	冬の部	しも晴の筑波や麦は二寸程	霜	天文
3909	明治33年	冬の部	霜よけを除けば花の薫じけり	霜よけ	人事
3910	明治33年	冬の部	恐ろしき地震の後や荒き霜	霜	天文
3911	明治33年	冬の部	霜とんで声あり達摩渡江の凶	霜	天文
3912	明治33年	冬の部	花さげて霜解に行脳み玉ふ	霜	天文
3913	明治33年	冬の部	花屋去て花屑散りぬ霜の庭	霜	天文
3914	明治33年	冬の部	山の氣の黒金臭し霜柱	霜柱	天文
3915	明治33年	冬の部	瀟湘や水に霜ふる朝月夜	霜	天文
3916	明治33年	冬の部	木枯や山のけものゝ糞乾き	凧	天文
3917	明治33年	冬の部	禮樂や魯の正月の朝朗	正月	時候
3918	明治33年	冬の部	夫子老いて二三子と谷の梅を見る	梅	植物
3919	明治33年	冬の部	乾坤の中に生れし海鼠かな	海鼠	動物
3920	明治33年	冬の部	紅きもの着たるもまじり寒念佛	寒念佛	人事
3921	明治33年	冬の部	正面に雪ふりかゝり寒念佛	寒念佛	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3922	明治33年	冬の部	暁天の氣を吹く老や寒念佛	寒念佛	人事
3923	明治33年	冬の部	難有きものに思ひぬ寒念佛	寒念佛	人事
3924	明治33年	冬の部	大雪の朝な / \ や寒念佛	寒念佛	人事
3925	明治33年	冬の部	講中の世話やきぢゝや寒念佛	寒念佛	人事
3926	明治33年	冬の部	西方の空も尊し寒念佛	寒念佛	人事
3927	明治33年	冬の部	大寒に入りし旦や寒念佛	寒念佛	人事
3928	明治33年	冬の部	恥かしの娘を誘ひ寒念佛	寒念佛	人事
10531	明治33年	冬の部	冷たかや水を飲まんと水に顔	冷たし	時候
10548	明治33年	冬の部	吹上ぐる谷の狭霧や蔦の橋	狭霧	天文
10569	明治33年	冬の部	烏瓜青きを獲たり茶の木原	烏瓜	植物
10577	明治33年	冬の部	鳩吹いて生き残りけり昔人	鳩	動物
4169	明治34年	冬の部	洋服に足駄は寒し小役人	寒さ	時候
4170	明治34年	冬の部	河豚ふゞき海鼠みぞるゝ形かな	雑	雑
4171	明治34年	冬の部	口切や布衣の交り面白き	口切	人事
4172	明治34年	冬の部	山もしぐれ海もしぐれつ天が下	時雨	天文
4173	明治34年	冬の部	俳諧は五升の酒や御命講	御命講	人事
4174	明治34年	冬の部	絨緞の花に据えたる火鉢かな	火鉢	人事
4175	明治34年	冬の部	染物の絹をも裂かん霰かな	霰	天文
4176	明治34年	冬の部	榮耀に飼はるゝ鷹の羽色哉	鷹	動物
4177	明治34年	冬の部	風呂吹の淡きに如かず河豚汁	河豚汁	人事
4178	明治34年	冬の部	河豚喰て発句に俗を罵りぬ	河豚	動物
4179	明治34年	冬の部	凧や貧乏神の火の車	凧	天文
4180	明治34年	冬の部	霜柱踏出てにけり朱の杵	霜柱	天文
4181	明治34年	冬の部	茶の花も小鳥も寒き日なりけり	寒さ	時候
4182	明治34年	冬の部	吾夫を尋ねあてたり薬喰	薬喰	人事
4183	明治34年	冬の部	納豆汁其曉の嶺の雲	納豆汁	人事
4184	明治34年	冬の部	落人の詮議かしこみ楳火哉	楳	人事
4186	明治34年	冬の部	別れとも知らぬ海鼠のあはれ哉	海鼠	動物
4188	明治34年	冬の部	乾鮭に御して渡海の心ざし	乾鮭	人事
4190	明治34年	冬の部	乾鮭や小鼻大鼻曲り鼻	乾鮭	人事
4192	明治34年	冬の部	乾鮭に寒梅の香もなかりけり	乾鮭	人事
4194	明治34年	冬の部	乾鮭や焚く枯菊の薄烟	乾鮭	人事
4195	明治34年	冬の部	天門の氷を開く力かな	氷	天文
4196	明治34年	冬の部	芭蕉忌のふとんかふりて物をよむ	芭蕉忌	人事
4197	明治34年	冬の部	夜興引の咎められたる迷ひ哉	夜興引	人事
4198	明治34年	冬の部	君が代は綿入足袋の老樂し	足袋	人事
4199	明治34年	冬の部	炉開に妻は男の子を生めり	爐開	人事
4200	明治34年	冬の部	詠の大蠟燭やえびす講	夷講	人事
4201	明治34年	冬の部	水仙にかゝる檜の匏屑	水仙	植物
4202	明治34年	冬の部	野は枯れて殺生石の氣騰りぬ	枯野	天文
4203	明治34年	冬の部	埋火の貧しからさる調度かな	埋火	人事
4204	明治34年	冬の部	隠現の鬼形や庭療ふけにけり	焚火	人事
4205	明治34年	冬の部	袴着や母は氏なきへりくだり	袴着	人事
4206	明治34年	冬の部	蛇を見る神の社の春近し	春近し	時候
4207	明治34年	冬の部	冴る月人を苦しむ姿かな	冴る	時候
4208	明治34年	冬の部	吹雪やんで川明らかに流れけり	吹雪	天文
4209	明治34年	冬の部	山見れば眠れり君はあらずして	山眠る	天文
4210	明治34年	冬の部	珍草や寒の雨ふる植物園	寒の雨	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4211	明治34年	冬の部	薬喰ふ小角力二人三人かな	薬喰	人事
4212	明治34年	冬の部	寒垢離や滝の不動の灯明か	寒垢離	人事
4213	明治34年	冬の部	年のくれ人參のんで首くゝり	年の暮	時候
4214	明治34年	冬の部	煤掃の煤に汚れず美なる珠	煤拂	人事
4215	明治34年	冬の部	掛乞の昔語となりけり	掛乞	人事
4216	明治34年	冬の部	夜明くるや追儼の宵を忘れ兒	追儼	人事
4217	明治34年	冬の部	よき酒に卵子割ったる炭火哉	炭	人事
4218	明治34年	冬の部	鯨突鯨の如き漢子哉	鯨	動物
4219	明治34年	冬の部	寐て起きて / \ 春を待つばかり	春待	時候
4220	明治34年	冬の部	炭うりの水仙さげて戻りけり	炭売	人事
4221	明治34年	冬の部	寒念佛例の坊主の頓死哉	寒念佛	人事
4222	明治34年	冬の部	雪沓の痕恐ろしき廟かな	雪沓	人事
4223	明治34年	冬の部	お火焚の跡の寒さや朝詣	御火焚	人事
4225	明治34年	冬の部	歌をよむ妻もこもれり雪車の中	雪舟	人事
4226	明治34年	冬の部	玉の如き男の子菖蒲の産湯哉	菖蒲	植物
4227	明治34年	冬の部	花に酔ひてぬるき湯に入る疲かな	花	植物
4228	明治34年	冬の部	さめやすき湯婆も悲し思ひやり	湯たんぼ	人事
4608	明治35年	冬の部	鷹狩や御手に一枝寒の花	鷹狩	人事
4609	明治35年	冬の部	鷹狩や皆曰く紂討つべしと	鷹狩	人事
4610	明治35年	冬の部	凧の確氷は悲し海の色	凧	天文
4611	明治35年	冬の部	金槐集海にしぐるゝ姿かな	時雨	天文
4613	明治35年	冬の部	夢に見る滄海の珠や冬ごもり	冬籠	人事
4614	明治35年	冬の部	山門を誦じ出でけり冬至の詩	冬至	時候
4615	明治35年	冬の部	行逢ひて衣の香にくし雪車の中	雪舟	人事
4616	明治35年	冬の部	水仙や冬鶯の死にし曉	水仙	植物
4617	明治35年	冬の部	鴛鴦や枯木吹ちる水の上	鴛鴦	動物
4618	明治35年	冬の部	年忘腹中の詩を盗まれし	年忘	人事
4619	明治35年	冬の部	発句帖萬句もあれと祝ひ言	雑	雑
4620	明治35年	冬の部	寒の入る刻とやなりぬ水の音	寒の入	時候
4621	明治35年	冬の部	粥柱赤きもの着て老菜子	粥柱	人事
4622	明治35年	冬の部	鐵鉢に米も少し寒の梅	寒梅	植物
4623	明治35年	冬の部	初夢の故人や既に執金吾	初夢	人事
4624	明治35年	冬の部	闇汁に風流貌の干菜かな	干菜	人事
4625	明治35年	冬の部	人の妻干菜の蔭にかくれけり	干菜	人事
4626	明治35年	冬の部	こゝにあると人に應へて干菜つる	干菜	人事
4627	明治35年	冬の部	油繪や干菜も下がり森の色	干菜	人事
4628	明治35年	冬の部	君が手のつめたき戀や干菜編み	干菜	人事
4629	明治35年	冬の部	赤蕪の赤きは一時流行ぞ	蕪	植物
4630	明治35年	冬の部	袴着や肌に守の觀世音	袴着	人事
4631	明治35年	冬の部	寒の入五更の豆腐声もなし	寒の入	時候
4632	明治35年	冬の部	袴着や朝日豊さか上りけり	袴着	人事
4633	明治35年	冬の部	難有や納豆に花が咲く法話	納豆	人事
4634	明治35年	冬の部	里神樂祢宜の娘を見たりけり	神樂	人事
4635	明治35年	冬の部	御神樂や五十鈴川波さゞら波	神樂	人事
4636	明治35年	冬の部	雪をふんで杉の下道神樂人	雪	天文
4637	明治35年	冬の部	歌かるた若き従兄の文學士	歌留多	人事
4638	明治35年	冬の部	都府楼の瓦の色や春を待つ	春待	時候
4639	明治35年	冬の部	珍草に春待つ人や鴻鷗館	春待	時候

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4640	明治35年	冬の部	春待つや或はかきからを丘に焚く	春待	時候
4641	明治35年	冬の部	春待つや美人を見ざること久し	春待	時候
4642	明治35年	冬の部	春待つや時々登る古城の上	春待	時候
4643	明治35年	冬の部	清浄や神樂に雪を焚く夕	雪	天文
4644	明治35年	冬の部	そば湯吹く兒も賢愚や台所	蕎麥湯	人事
4645	明治35年	冬の部	ぬくめ鳥松の梢に旭出でたり	暖め鳥	動物
4646	明治35年	冬の部	荒浪のつらゝかみ去る窟かな	垂氷	天文
4647	明治35年	冬の部	兒見世や寐たる姿の東山	顔見世	人事
4648	明治35年	冬の部	柴漬の獲物買ひけり岸の人	柴漬	人事
4649	明治35年	冬の部	老人の何に驚く岡見哉	岡見	人事
4650	明治35年	冬の部	年木こり雪に黄金を拾ひけり	雪	天文
4651	明治35年	冬の部	乾鮭に眉を描かんとぞ思ふ	乾鮭	人事
4652	明治35年	冬の部	風呂吹を召され候ぞと申す	風呂吹	人事
4653	明治35年	冬の部	顔見せや江戸は名高き男伊達	顔見世	人事
4654	明治35年	冬の部	しはぶきや雑魚寐に洩れし人はたれ	雑魚寝	人事
4655	明治35年	冬の部	垣越に山の眠りや寒の雨	寒の雨	天文
4656	明治35年	冬の部	納豆の寂寞として苞の中	納豆	人事
4657	明治35年	冬の部	河豚汁豆腐軽くして浮きぬ	河豚汁	人事
4658	明治35年	冬の部	納豆汁豆腐や白く潔し	納豆汁	人事
4659	明治35年	冬の部	方正を守る豆腐や狸汁	狸汁	人事
4660	明治35年	冬の部	薬喰豆腐は白き君が兒	薬喰	人事
4661	明治35年	冬の部	煮凍の豆腐や墨子悲めり	煮凝	人事
4662	明治35年	冬の部	けふもやく夕げの豆腐冬ごもり	冬籠	人事
4663	明治35年	冬の部	豆腐汁坐に松影の冬至哉	冬至	時候
4664	明治35年	冬の部	法話未だ已まず豆腐既に氷りぬ	凍る	天文
4665	明治35年	冬の部	詩債あり除夜も豆腐の煮ゆるまで	除夜	時候
4666	明治35年	冬の部	味ひや豆腐の焦げも冬ごもり	冬籠	人事
4667	明治35年	冬の部	袴着やこゝに年ふる陰陽師	袴着	人事
4668	明治35年	冬の部	袴着や軒を并べて三長者	袴着	人事
4669	明治35年	冬の部	袴着の古式はめでた尽し哉	袴着	人事
4670	明治35年	冬の部	納豆臭き寺の男や物不知	納豆	人事
4671	明治35年	冬の部	納豆の容りも厨かな	納豆	人事
4672	明治35年	冬の部	空山に納豆打つ音響きけり	納豆	人事
4673	明治35年	冬の部	納豆汁杓子にさはる物もなし	納豆汁	人事
4674	明治35年	冬の部	雪一白岩戸神樂に夜明けたり	神樂	人事
4675	明治35年	冬の部	冬菜汁葱の臭きを厭ひけり	冬菜	植物
4676	明治35年	冬の部	書きすてつ丸めつ火鉢の火に投ず	火鉢	人事
4677	明治35年	冬の部	逆鱗にふれてまかでぬ枯柳	枯柳	植物
4678	明治35年	冬の部	人の子のあかぎれの手や涙ふく	鞞	人事
4679	明治35年	冬の部	黒土や葱の折葉も凍つきて	葱	植物
4680	明治35年	冬の部	子に頭巾かぶり / \ と一茶坊	頭巾	人事
4681	明治35年	冬の部	寒月やけもの突くべき竹の槍	寒月	天文
4682	明治35年	冬の部	北風の雪吹つける枯木哉	吹雪	天文
4683	明治35年	冬の部	玉子酒夜間物かく小説家	玉子酒	人事
4684	明治35年	冬の部	馬に鍼す冬一日をトしけり	冬	時候
4685	明治35年	冬の部	鐘冴えて聞えん灯見ゆる野の小家	冴る	時候
4686	明治35年	冬の部	昔人の此夜の詩句や年ごもり	年籠	人事